

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24617006

研究課題名(和文) 翻訳の倫理をめぐる総合的研究

研究課題名(英文) Integrated Research on the Ethics of Translation

研究代表者

今野 喜和人 (KONNO, KIWAHITO)

静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：70195915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,300,000円

研究成果の概要(和文)： 翻訳者が直面する美学的・社会的・政治的・法的・経済的等々の<倫理>上の問題について、国際的かつ学際的に論じた総合研究である。文学以外にも映画や美術、音楽など様々なメディアを対象とし、多くの言語・地域・時代における実例を分析した。

これにより、テキストの性格、読者の期待の地平、起点言語と目標言語の関係を規定する文化的・歴史的・言語学的背景、出版に関わる商業戦略、検閲や弾圧を行う政治・宗教権力の介在といったさまざまな要素によって、翻訳の倫理が多様に現れる状況を示し、翻訳理論研究にも貢献できた。

研究成果の概要(英文)： This integrated research aimed to address in an international and interdisciplinary perspective the ethical issues (aesthetic, social, political, legal, economical) faced by translators. Besides literature, our analysis took into account films, art, music as well as other forms of media, covering a wide range of languages, countries and historical periods.

Based on this methodology, we demonstrated that ethical problems stemming from translation appear in various contexts and are mediated through a wide range of cultural practices such as the creation of texts as autonomous entities, the importance given to the reader's response, the limits given to the relation between source language and target language, the publishing strategies, censorship, as well as the impact of political and religious pressures. Our approach allowed to contribute in a significant manner to the emerging field of translation studies.

研究分野：比較文学文化

キーワード：翻訳学 比較文学 比較文化 芸術論

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

翻訳は原テキストと訳文の間の、ある種の「等価性」を追求する営みであり、翻訳者はその等価性を確保するために「忠実さ」や「忠誠」の規範に従うことを求められる。その要請に応えつつ、常識的限度を超えた誤訳や、極端かつ意図的な改変を行わない限り、基本的に訳者の「責任」を問われることはないと考えられがちである。しかし、そもそもどのテキストを訳すか、という訳者の決定自体、時代の経済・文化・政治状況と遊離して、あらゆる倫理的責任と無関係に下すことはできない。さらに原テキストのどの要素(意味、形式、美的価値、読者に与える効果等々)に対して「忠実」であるべきかは訳者の選択に任されており、その過程で否応なく倫理的問題にぶつかることがある。例えば、古典古代以来、翻訳があるところで必ずと言ってよいほど問題にされてきた二項対立(直訳対意訳、逐語訳対自由訳等)においても、訳者がどのスタンスを取るかについては、テキストの性格、読者の期待の地平、目標言語の特性、起点言語と目標言語の関係を規定する文化的・歴史的背景、出版に関わる商業戦略、検閲や弾圧を行う政治・宗教権力の介入といったさまざまな要素が絡み、翻訳者の下した判断について倫理的な責任を問われ得る場面が無数にある。

したがって、翻訳もしくは翻訳者の倫理を学術的に問う意義は十分にあると考えられるが、これまでにこの問題を総合的に捉えた研究はほとんどない。上記の二項対立を主に他言語から英語への訳を行う翻訳者について、「可視化」と「不可視化」の対立軸で捉えたヴェヌティの著作(L. Venuti, *The Translator's Invisibility*, 1995)はこのテーマに関係した重要文献である。また、それ以外にも欧米の翻訳理論や翻訳詩学でいくつかの重要な研究が現れているもの(A. Pym, *Pour une Ethique du Traducteur*, 1997, S. Bermann, et al(ed.), *Nation, Language, and the Ethics of Translation*, 2005, H. Meschonnic, *Ethique et Politique du Traduire*, 2007 等)。扱われる言語の数を含めて、いずれも視野は限定的であり、特に日本国内での状況は単発的な論文の発表に留まっている。

(2) 着想に至った経緯

今回の応募メンバーは平成 20 年度から 22 年度にかけて交付を受けて行った科学研究費補助金基盤研究(C)「恋愛・結婚をめぐる異文化交流・翻訳の諸問題」(課題番号 20520321)の研究代表者、分担者を中心としており、分担者 9 名のうち 8 名は同一学科に所属している。応募者はいずれも特定の言語領域(日・中・韓・英・仏・独・西・露)における近現代の文学・思想・芸術を主たる専門領域とし、異なる言語文化同士の接触・対

立・吸収・相互浸透などに特に関心を抱いて研究を進めるとともに、実際の翻訳活動にも携わっている。既に平成 17 年度には、所属学科の競争経費の配分を受けて「翻訳文化研究会」を組織し、異文化理解と衝突の微妙なありようがテキストの中に顕在化する広義の「翻訳」について学際的・多角的な研究を行ってきた。

それ以来、年数回のペースでメンバーもしくはゲストの研究発表会を開催し、その成果を毎年度末、『翻訳の文化/文化の翻訳』として纏め、平成 22 年度末に発行された同誌別冊では同科研究費研究の成果について、総特集号として発行した。その他に、各自の所属学会や学術雑誌誌上等でもいくつかの論考を発表している。それぞれが実践している翻訳活動と、これらの研究とは直接・間接に相互貢献している部分も多い。

今回は平成 22 年度まで行われた上記基盤研究における成果を踏まえつつ、その中で浮上した翻訳の「倫理」問題にテーマを絞り、かつメンバーを増やすことでさらに領域を拡大して集中的考察を行うべく計画されたものである。翻訳における広義の「倫理」問題は応募者各人が行っている実際の翻訳活動においても意識せざるを得ない問題であり、同科研究費を用いて開催した作家たちの招待講演(楊逸、よしもとばなな、リービ英雄)でも議論の俎上に乗ったことが本研究の出発点となっている。なお、連携研究者のエゲンベルクはよしもとばななのいくつかの作品の独訳者でもあることから、平成 21 年度に同科研究費を用いてセミナーを開催し、公開の場で原著者と翻訳者の対話が実現したことは、今回のプロジェクトにも大きなインパクトを与えている。その他、既に平成 23 年度に連携研究者野崎は「翻訳家にとって 倫理 とは何か」のテーマで研究発表を行い、今回の応募の方向性の一つを示した。

2. 研究の目的

主に文芸翻訳の分野で、翻訳者が逢着する美学的・社会的・政治的・法的・経済的等々の倫理上の問題について、国際的かつ学際的に光を照射する総合研究である。比較文学比較文化やカルチュラル・スタディーズの重要な一分野でありながら、個別の実例研究に終わりがちで体系化が困難な翻訳研究について、倫理 という切り口を用いて問題群をトータルに見直し、詩学研究、異文化理解にも貢献することを目指す。

3. 研究の方法

研究代表者の今野は翻訳における倫理の問題を、近年の翻訳理論の成果を通じて基本的に整理し、分担者全体の共通了解事項とすることに意を注いだ。その上で、各人が研究対象とする領域について、主に下記テーマ群との関連で考察し、その結果を翻訳理論の考察に還元して、具体的分析と理論構築を相互

に精妙化することを目指した。

(1) 詩的表現の翻訳可能性と不可能性

詩もしくは詩的表現の頻出する散文作品の翻訳可能性については昔から議論が積み重ねられてきた。解釈が多様である表現について、どの解釈を採用して訳文に反映するか、起点言語と目標言語における表現の新奇性と凡庸性にねじれが生じる場合の戦略などを、翻訳者の美学的倫理の問題として捉え直す。

(2) 性愛表現、スラング、差別語、方言等の翻訳

言語事情や道徳規範の異なる言語文化同士で翻訳が行われれば、そこに倫理上の衝突が起こり、翻訳者は社会的・道義的・法的責任を問われる場面が生じる。それは性愛や暴力・差別に関する表現で如実に現れるが、方言(地域的・社会的)や個人言語をどう訳すかという方針においても、翻訳者やそれを受容する読者の社会意識が問われることがある。

(3) 翻訳におけるオリエンタリズム、コロニアリズム

アジアにおける翻訳は基本的にオリエンタリズムの中で形成され、翻訳自体がオリエンタリズムを体現する行為であった。またそれは言うまでもなく、コロニアリズムをも反映していた。つまり、翻訳行為=自己オリエンタリズム=自己コロニアリズムであり、それがアジアにおける翻訳行為の宿命であったといえる。

(4) 原著者と翻訳者の権利について

原著者は翻訳に対してどれだけ口を挟むことができるのか。翻訳者はそれに対してどれだけ自分の主張を貫くことができるのか。この点が問題化するかどうかは、作者の個性にも左右されるが、作者の目標言語に関する知識の有無、起点言語文化と目標言語文化の間の政治的・経済的関係性という外面的状況によっても事情が異なってくる。これは母語以外の言語で創作活動を行う作家の「自己翻訳」の問題とも深く関係する。

(5) 小説の映画化、映画のノヴェライゼーションの問題

メディアの壁を飛び越える「翻訳」(ヤコブソンの言う記号系間翻訳)の場合、原作への「忠実さ」に対する要請が通常の言語間翻訳とは異なった形で現れるほか、商業化・大衆化のための方略や政治的配慮がより顕在化することがある。小説の映画化や、原作を必ずしも持たない映画のリメイク、政治的・宗教的権力による検閲の問題などを通じて、この問題を考察する。

4. 研究成果

翻訳者が直面する倫理上の課題を多角的、重層的に扱うべく、取り扱う言語、地域、時代、領域、メディア、ジャンルをできる限り広くすることを心がけた結果、総合的研究の名に恥じぬ成果が生まれたと思われる。論じ

られた言語は日本語、中国語、韓国語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、時代は古代ローマから現代まで、領域的には文学、詩学、美学、映像論、倫理学、哲学、社会学、心理学、政治学、法学、哲学等、極めて多岐にわたっている。以下、メンバー別の研究成果のうち、主要な部分を概説する。

研究代表者の今野は理論面の考察を行うと共に、明治初期の翻訳家、箕作麟祥の訳業について、西洋キリスト教的道徳を日本に紹介するにあたって、どのような工夫を訳者が行ったかについて詳細に検討した。これによって「倫理の翻訳」が行われる際の「翻訳の倫理」の一端を示すことが出来た。

田村は小説と映画における芸術間翻訳の研究と同時に、研究成果を報告する過程で生じる映像著作権の問題に取り組んだ。前者については小説と映画のあいだという共通副題のもとに「川端康成『山の音』と小津安二郎監督『晩春』」および「川端康成『美しさと哀しみと』」をめぐる2本の論文を刊行し、パリで開催された国際シンポジウム「川端康成 21世紀再読」で研究発表を行った。後者については具体的事例に沿った報告書を作成した。

南は、ル・ボンの民族心理学のアジアへの受容について、その翻訳ルートの多様な変遷と翻訳過程における国家間の思惑や倫理問題を主として扱い、日本近代思想の一分野の系統を明らかにした。同論については一層の考察が行われ、対象範囲が広がり、韓国で行われた国際シンポジウムで注目されている。

安永はアンリ・メシヨニック(1932-2009)、ポール・ヴァレリー(1871-1945)、パトリック・モディアノ(1945-)を対象とし、翻訳の倫理に纏わる諸問題について主に検討し、論文4本、書評2本を発表、国際学会での口頭発表を1件行った。翻訳にも携わっており、2012年末にモディアノの小説『家族手帳』の翻訳を上梓し、2014年秋には、モディアノのノーベル賞文学賞受賞記事を執筆した。

桑島は、中国僻村の不条理を描き続ける中国人作家・閻連科の代表的作品を取り上げ、倫理や翻訳に関わる問題を考察した。その結果、『受活』(2004)では、身体的には「人間以下」の身障者たちは倫理の欠如した世界に住む健常者たちよりよほど人間らしいのでは?という価値観の顛倒を、『チャタレイ夫人の恋人』を中国風に「翻案」した『人民に奉仕する』(2005)では、延安において戦時の特殊な必要性から生まれ、文化大革命にもつながってゆく毛沢東時代の精神・倫理規範の破壊を、『魔術的リアリズム濃厚な『丁庄の夢』(2006)では、中国文明発祥の地に生まれ育ち、歴史の古層とつながる中国僻村の人びとの生存感覚・死生観を、浮かび上がらせた。

花方は、小説と映画、あるいは映画のリメイクというメディア間翻訳をめぐる倫理的考察を行った。まず前半期においては、ブラ

ム・ストーリーの小説『ドラキュラ』がドイツで監督F. W. ムルナウによって『ノスフェラトゥ』として映画化された際に生じた著作権侵害をめぐる裁判の経緯と実際の作品間の共通点と差異を分析し、メディア間翻訳の特殊性と法的问题、および倫理的問題について論じた。また後半期においては、映画『他人の家』とその正式なリメイクである映画『折れた槍』を比較し、共通する物語構造を備えていても大きくメッセージの異なる作品をオリジナルの「翻訳」と呼べるのかどうかを論じ、さらに両作品を同時代アメリカにおける赤狩りの激化というコンテクストに置くことによって、「翻訳」行為における倫理的問題を一元的な基準によって判断することの難しさを明らかにした。

山内は主として、アメリカの詩人マイケル・パーマーとフランス在住の画家アーヴィング・ペトリンの共作をめぐる研究を行った。結果として、パーマーとペトリンが、表象不能なもの（アウシュヴィッツを始めとする20世紀の惨禍に巻き込まれたユダヤ民族の声）を敢えて作品に内在させる試みに挑んでいる点が明らかになった。この点は、芸術家と倫理の問題をめぐる本研究課題と直接関連する成果になったと考えられる。またパウル・ツェランやエドモン・ジャベスの実践にまで及ぶこの問題系は、今後翻訳の問題について考察する上で看過できない視点を提供することになった。

大原は翻訳の倫理の主要なテーマであるアダプテーションと著作権について、セルバンテスの戯曲『ヌマンシア』を中心に、セルバンテスのオリジナリティーに対する再評価というかたちでアプローチした。セルバンテスへの過大評価により一面的な解釈しかされてこなかったヌマンシアについて、その起源と史実、物語の構成要素と黄金世紀に至るまでの各時代の改作とその背景の変遷を追い、セルバンテスがどのようにそれらを寄せ集め、戯曲としたのかについて、構造を明らかにした。それによりヌマンシアをセルバンテス個人の作品としてではなく、欧米文化の流れの中の重要な表象として位置づけた。

コルベイは1960年から1980年にかけてフランスと日本の小説と映画における倫理の問題とメディアによって異なる描写手法を比較しながら、翻訳（翻案）と倫理の関係性を考察した。主に、倫理のジレンマをテーマにするアダプテーション映画（文芸映画）とその原作を比較し、メディアによる表象可能性と不可能性を明確にした。そして、メディアによって政治や検閲の影響で変化する作品内容も分析した。また「翻訳者」の社会的役割を考察し、フランスより日本の方が重要な社会的立場を持つ日本の翻訳者の権利と義務を分析した。

以上の分析により、テキストの性格、読者の期待の地平、起点言語と目標言語の関係を規定する文化的・歴史的・言語学的背景、出

版に関わる商業戦略、検閲や弾圧を行う政治・宗教権力の介在といったさまざまな要素によって、翻訳の倫理が多様に現れる状況を示し、翻訳理論研究にも貢献できたと思われる。また、本研究では一つのメディアを越えた翻案や改変がしばしば研究対象となったが、これはメディアとメディアの境が曖昧になる現代の文化状況、いわゆる「ポストメディア」を象徴するものであり、「ポストメディア」自体を展望に入れた研究を今後は目指すことになる。

なお、連携研究者のトーマス・エゲンベルクはよしもとばななの小説『みずうみ』を研究期間中に独語訳出版した。同じく連携研究者の野崎歎と、芥川賞作家の中村文則を招聘し、本研究メンバー数名が加わったシンポジウムを静岡市で開催して、当該研究の一般への成果還元を行ったことも付言しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 28 件)

今野 喜和人、翻訳の倫理と倫理の翻訳
箕作麟祥の訳業をめぐる、翻訳の文化 /
文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、
13-25

DOI:10.14945/00008209

田村 充正、小津映画の様式（付・映画研究における映像著作権の問題）、翻訳の文化 /
文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、
27-68

DOI:10.14945/00008210

南 富鎮、李光沫文学の比較文学的系譜
ル・ボン、夏目漱石、魯迅、本間久雄を軸
にして、韓国文学の比較文化的なアプローチ、
査読無、2、2015、13-30

安永 愛、書くことの源泉をめぐる ヴァレリーとモディアノの場合、翻訳の文化 /
文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、
69-81

DOI: 10.14945/00008211

桑島 道夫、閻連科の小説に見る倫理、翻
訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号別
冊、2015、83-89

DOI: 10.14945/00008212

花方 寿行、原作・映画・リメイクをめぐる「倫理的」問題の複雑さ 映画『他人の家』と『折れた槍』、リベラリズムの限界と赤狩りをめぐって、翻訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、91-119

DOI: 10.14945/00008213

山内 功一郎、「誰でもないもの」の声が生じるとき マイケル・パーマーとアーヴィング・ペトリン、翻訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、121-139
DOI: 10.14945/00008214

大原 志麻、『ヌマンシア』におけるセルバンテスのアダプテーション、翻訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、141-154
DOI: 10.14945/00008215

Steve CORBEIL, Imamura Shohei's adaptation of Nosaka Akiyuki's *The Pornographers*: Ethical Representations of Translating the Unwritten、翻訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号別冊、2015、155-165
DOI: 10.14945/00008216

Thomas EGGENBERG, Brieftaschen, Eier, Wunder von der Schwierigkeit, das richtige Wort tu finden、翻訳の文化 / 文化の翻訳、査読無、第 10 号、2015、65-78
DOI: 10.14945/00008201

〔学会発表〕(計 7 件)

田村 充正、Le Japon poétique - *Le Grondement de la montagne et les films d'Ozu*, Relire KAWABATA, 2014 年 9 月 18 日、ディドロ大学、パリ (フランス)

安永 愛、《Penser virtuosement》: 《Virtuose》 et 《Virtuosité》 chez Paul Valery、国際比較文学会、2013 年 7 月 23 日、ソルボンヌ大学、パリ (フランス)

山内 功一郎、“だれでもないもの”の声が生じるとき Michael Palmer と Irving Petlin のコラボレーション、日本アメリカ文学会全国大会、2012 年 10 月 13 日、名古屋大学 (愛知県名古屋市)

〔図書〕(計 5 件)

(翻訳) エゲンベルグ トーマス (よしもとばなな著), *Der See* “「みずうみ」, Diogenes 社、2014 年、224 頁

(翻訳) 今野 喜和人 (ルイ・クロード・ド・サン=マルタン著) 『クロコディル 十八世紀パリを襲った怪物』国書刊行会、2013 年、345 頁 + 解説 14 頁

(翻訳) 安永 愛 (パトリック・モディアノ著) 家族手帳、水声社、2013 年、232 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今野 喜和人 (KONNO, Kiwahito)
静岡大学・人文社会科学部・教授

研究者番号: 70195915

(2) 研究分担者

田村 充正 (TAMURA, Mitsumasa)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 30262786

南 富鎮 (NAM, Bujin)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 30362180

安永 愛 (YASUNAGA, Ai)
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 10313917

桑島 道夫 (KUWAJIMA, Mitsuo)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 80293588

花方 寿行 (HANAGATA, Kazuyuki)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 70334951

山内 功一郎 (YAMAUCHI, Kouichiro)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 20313918

大原 志麻 (OHARA, Shima)
静岡大学・人文社会科学部・准教授
研究者番号: 80515411

コルベイ スティーヴ (CORBEIL, Steve)
静岡大学・大学教育センター・講師
研究者番号: 80469147

(3) 連携研究者

エゲンベルグ トーマス (EGGENBERG, Thomas)
静岡大学・大学教育センター・准教授
研究者番号: 90447798

野崎 歓 (NOZAKI, Kan)
東京大学・人文社会科学部・教授
研究者番号: 60218310